

ともに学ぶことは、ともに生きること

実践に見るインクルーシブ最前線

近年注目されるインクルーシブ教育は、障がいのある無国籍、性別、経済状況などに関係なく全ての子どもが同じ場所で学ぶことを目指す教育の在り方だ。その理念は、誰も排除されることがなく、個々の違いを尊重しながら共に生きる社会の実現に向けた一歩である。障がいのある生徒と、そうでない生徒が出会い、関わる。その中で見えてくるのは、教育の在り方だけでなく、社会の姿そのものかもしれない。私たちは特別支援教育の現場で行われた実践に立ち会い、そこに込められた思いや課題を取材した。（文 喜多輝）

人と人との「差」をなくす

「障がい者」について、何気なく差別的言動を繰り返してはいないだろうか。そもそも障がいについてどれほど知っているだろうか。本校では金沢大学附属特別支援学校（以下「特支」と）と提携した活動を数年前から行っている。今回は、本校と特支の架け橋として奮闘する2Bの北崎青志郎さんを追った。北崎さんは探究を進める中で、「障がい者」とのありのままの姿と、障がい者と健常者の相互理解の推進を目標に掲げている。そして障がい者、健常者のどちらも楽しむことができるイベントの企画を中心に、探究でも、生徒会執行部副委員長としても、精力的に活動を行っている。



ポッチャイイベント終了後の集合写真＝北崎さん提供

北崎 昨年、ポッチャイという障がい者スポーツの大会が特支で開かれまして、そこに本校の2年生4人が参加して補助をしました。逆に、ここに投げ込んだらどうなるかを指示してもらったり、教えてもらったりしました。最後には、親善試合をして交流を深めました。あと、一緒に給食を食べるというところまで進みました。

探究へ突き動かすもの

「こうやって活動しようと思っただけじゃありませんか。北崎 先輩に、探究で外部の企業とつながる活動を通して起業している方がいて、その方に憧れて活動しようと思ったんです。ですが、その過程で特支がさきも言っていたお菓子の販売という、ビジネスというか経営みたいなことをしているという話を聞きました。普段からそういった実践を行っている学校のお話を聞くことがないので、実際に生徒の話を聞きに行こうと思って、特支に伺いました。そこで、特別支援とインクルーシブ



ボウリングを楽しむ参加者たち

笑顔咲くボウリングイベント

今回、我々は北崎さんと、共同

「探究へ突き動かすもの」

「今後の展望を教えてください。北崎 7月29日にボウリングイベントをやりました。他にもいくつか活動しています。その1つが海岸清掃です。具体的には、ドローンを使って上空からゴミを探して、その場所に取りに行ってもいいというものです。そのドローンの操縦を私が担当しています。これからの活動も、より多くの人に「障がい」に対して正しい理解を持ち、ともに助け合っている社会の実現に向け、半徑1メートルから社会を少しずつ変えていきたいです。

成長を横で見守る目

教員が見つめる子どもたちの未来

現場を熟知する教育者は、インクルーシブ教育実現に向けた歩をどのように捉えているのだろうか。我々はイベント後、特別支援学校の鶴尾千亜紀副校長に取材した。

「特別支援学校の生徒とそうでない生徒が関わることは、どういう意義があるとお考えですか。鶴尾 本当なら障がい者、健常者なんて分けずに一緒にいてもおかしくない子たちだよね。それをあえて学びを深めるために、それが自分の学びに合ったことをやってみる。でも、「それぞれの世界だけで生きていけばいいか」というふうな、そうではない。狭い世界の中から広がりがあるか、世界の中からもっと広がりがあつて、いろいろな子とつながり、少しかなりが持たせてくれるきっかけになるかなと思います。

特別支援学校だからこでできるまほひ

「普通科高校と特別支援学校でカリキュラムはどういう違いがありますか。鶴尾 例えば、火曜と木曜は1日中「作業学習」という働くための学習をしていてね。国語とか数学もあるけど、どちらかというと「生きるため、生活するための」の学習。それが大きくカリキュラムに位置づけられているかな。そこで課題になったことを、教科の学習にも反映していく。例えば、クッキーのグラム数を量るときに、グラムが量れなかったり、数の概念が分かっていなかったりしたときに、先生がそれを数学の学習に落とし込んでくれる。「生きるため」「生活するため」に使える数学が

い緊張状態が続いていた。しかし、参加者は皆初心者であり、ボウリングイベントといってもスコアの高さや技術を競い合うものではなく、ゲームの途中で誰かがミスをしたらみんなで「ドンマイ！」と声をかけ、ストライクを取ったら少し気恥ずかしさを感じつつもハイタッチをする。障がい者、健常者などという境界は

もはやそこにはなく、全員が「できない」を当たり前に捉え、自分のことも他人のこともけなさず、互いを認め合う雰囲気の中で進んでいった。そして特支の先生方も生徒がピンを倒したら大げさに見えるほど大きく喜びをあらわし、生徒に対してこの上ないほどの愛情を持って接していた。互いに助け合い、喜び合う、他のどこにもないような独特の温かい空気が生徒たちを包み込んでいた。

ボウリングイベントの終了後は閉会式が行われ、成績の良かった選手が表彰された。表彰された選手は「こんなに良い点数を取ることができると思っていた。また、表彰された生徒からも「みんな、表彰された生徒からも「みんな、達成感と充実感に満ちたものであった。」



特支の生徒とハイタッチをする参加者の辻さん（2B）

総括

「特別支援学校」「障がい者」――私たちは日常の中で、こうした言葉を「距離を置くためのラベル」として使っている。障がい者という存在が、障がいのある人々、その度合いが少し大きかったり、その度合いが少し小さかったり、それを理由に、彼らを「異質な存在」として扱うことは、私たちが人間性が問われる行為である。「障がい」は個性だ」として、今回の取材を通して、理想と現実

の間に葛藤があることも事実だ。健常者とまったく同じ扱いを求めたいという思いと、時に無理を生むこともある。だからこそ、障がいがある人々、その度合いが少し大きかったり、その度合いが少し小さかったり、それを理由に、彼らを「異質な存在」として扱うことは、私たちが人間性が問われる行為である。「障がい」は個性だ」として、今回の取材を通して、理想と現実

「障がい」の有無にかかわらず、互いを尊敬し、歩み寄る姿勢を私たちに伝えてくれた。それは教育の枠を超え、人間としての在り方を問い直すメッセージでもある。目の前の「違い」に対して、まっすぐに向き合い、障がい者を共に生きる仲間として受け入れること。その第一歩は、無知を知り、変わろうとする意志にある。今回の取材は、その意志を育むことの重要性を認識し、発信する、貴重な機会となった。（文責 喜多）